

人生、手荷物いらず



「地下鉄サリン事件被害対策  
弁護士団」の団長も務める宇都  
宮健児さん

日本弁護士連合会の会長も務めた弁護士の宇都宮健児さん(70、1965年卒)は、ビルマ(現在のミャンマー)の戦地で負傷した足を引きずりながら農作業をする父を「早く楽にしてあげたい」と、小さいころから思い続けていた。

プロ野球選手を夢見たが、体が小さかったためあきらめた。代わりに卓球で、熊本高校時代は県大会ベスト4の成績をおさめた。勉強面では数学や物理が得意だったが、「人間として成長したい。理系だと偏ってしまうのではないかと、東京大学の文科一類に進学した。大学2年の終わりのころに読んだ本で、部落差別がまだ存在することにショックを受けた。「自

分の家も貧しいと思っていたが、もっと厳しい境遇の人がいることを知った」。大学卒業後は官僚になって親孝行しようかと思っていたが、立身出世を考えることが後ろめたく思えた。これを機に、法律を武器に人助けができる弁護士になろうと猛勉強。大学在学中に司法試験に合格した。

消費者金融による多重債務者の救済を数多く扱った。貧困問題にも取り組み、「反貧困ネットワーク」の世話人代表も務める。2012年と14年には東京都知事選に出馬した。「都政を変えれば、そのインパクトも大きい」。どちらも次点だったが、昨年の都知事選にも、一時は名乗りを上げた。

弁護士になって今年で47年目。困っている人のために駆け回る日々が続く。宇都宮さんとは同学年だが、対照的ともいえる軽妙洒脱な人生を歩んできたのは、コピーライター魚住勉さん(70、65

年卒)。自由な校風の熊本高校では、ルールや団体行動が嫌で部活には入らず、放課後は友だちと街をぶらぶらしたり、他校の女子とデートしたりと、「放課後の高校生活」を満喫した。慶応大学に進学。「大学は慶応」と小さいときから心に決めていた。父親も慶応出身で、親戚にも多く、小学生のころから自分の部屋に慶応の三色旗を貼っていたほどだった。

将来は好きなことを仕事にしたい、会社に行かなくていい自由な仕事、小説家もいかな、でも飽きっぽいから長い文章はイヤ……。直感的で芸術的なものが得意だったので、ポスターやCMなどで短い言葉を使って表現するコピーライターになった。大学卒業後に広告制作プロダクションを経て独立した。

サントリーや丸井、パルコなどの広告を数多く手がけた。後に作詞もするようになり、デュエット曲「男と女のラブゲーム」をはじめ、ロックやアイドルの曲など、ジャンルは多岐にわたる。楽曲の著作権使用料が入ってくるので、今は「あこがれの印税生活」を送る。「人生、手荷物いらず。難しくしないほうがいい」



「自分の好きなことをしてあげると、自分が育ちます」と魚住勉さん